

海が見える丘で（第三部）

ひたちなかの魔物退治の旅を続けるエルダーたち。仲間たちが交流を深める中、エルダーはまだ誰とも特別イベントが発生していなかった。

・エルダーⅡケルデイル（十八）

冒険者の青年。群馬の者は訛りが無いという暴論を信じている。

・オーヴァルⅡクレイグ（二十九）

水戸出身の高等学校教師。万人受けするような顔立ちの美男子。茨城には海がある時点で群馬と栃木よりも魅力があると思っっている。

・ファルネウスⅡヴィクトー（二十四）

ひたちなか出身の冒険者。性別を超越した存在。実は学歴が高い。

・アルレシャⅡイグザレルト（四十二）

ひたちなか出身の筋肉隆々な役人。両親もひたちなかの役人だった。踊り子の格好をしているため、彼が役人だと認識されることはほとんどない。

・ユリアンⅡコルビュジェ（二十二）

ひたちなか出身の役人。干し芋はそこまで好きじゃない。職場は実家から通える距離なのに一人暮らしをしている。

・フィニアⅡニレコ（十八）

ひたちなか出身の神官。栃木、群馬には生まれてこなかった行ったことがないため、海が無い場所、という印象しかない。

・トールレンスⅡオルトリンデ（二十一）

栃木出身の茨城学院三年生。彼も美男子だが、万人受けするのはオーヴァルの方。海に対して並々ならぬ憧れを抱いている。「しもつかれ」は食べられる。

どうやらサビに入ったようだ。

この曲を恋人、リリアンヌと聴いたのは、茨城学院の文化祭の時だった。夜の二十時から行われる後夜祭で、名前は忘れてしまったが、ある部活団体が披露していた。

周囲にも学生がたくさんいたはずだが、リリアンヌしか目に入らなかった。愛する恋人と後夜祭を楽しんでいる幸せな瞬間を、オーヴァルは一生忘れないと思った。

「何という曲なのだろう」

「知らないわ。——でも、良い曲ね。あなたと聴いているからかしら」

そう言って微笑むリリアンヌは、時が止まったと錯覚するほど美しかった。

「リリアンヌ……」

薄紫色の髪の毛の間が微かに顔を強張らせるのが見えた瞬間、オーヴアルの意識は現実に戻された。

「——悪かったね、暗い話を」

「オーヴアル」

歩き出そうとしたオーヴアルを、ファルネウスは止めた。

「私で良ければ、いつでも話を聞くわ。アンタが辛いとき、苦しいとき……いつでもアンタの話を聞きに来てあげるわ。この旅が終わった後もね」

オーヴアルは驚いて、仲間の顔を見据えた。

「それは悪いよ」

何か言いかけたファルネウスより先に、オーヴアルは続けて言った。

「私もひたしなかに来るよ。君ばかり来させるのは申し訳ないからね」

自然と言葉が口から滑り出ていた。

ファルネウスも目を丸くしたが、すぐに笑みを浮かべた。

「旅が終わっても、また会いましょうね。必ず」

「もちろん」

頷きながらオーヴアルは、この約束は一種の呪いのようだと思った。——これで、自分はもうしばらく死ねそうにない。

「さあ、薬屋に行こう。皆を待たせてしまう」

「ええ」

エルダーはフィンニアとアルレシヤと共に、防具屋にいた。

「もつといい盾持っとくべきかな」

エルダーは鉄製の盾を手にした。エルダーは、バックラーしか持っていない。

「そうだな。これからもつと強敵が現れるかもしれん」

「フィンニアも何か買った方がよいぜ。防御アイテム持ってなさそうだし」

「そうですね……」

フィンニアも鉄製の盾を手を取った。しかし、持ち上げる手がおぼつかない。

「重い？ バックラーとかの方が良いかもしれん」

エルダーは自分が持っていたバックラーをフィンニアに渡した。

「あつ、こっちの方が使いやすそうです」

「じゃあ、それあげるよ。——すいません、これください」

エルダーは鉄の盾の代金を店主に渡した。

「アルレシヤは？ 何か買わなくて良いのか？」

アルレシヤは自身の露出の多い、身軽な踊り子の服に視線を落とした。

「そうだな。この服だと防御力はほとんど無いからな」

まあ、あなたには屈強な身体っていう防御力高めめの装備があるけどね。

エルダーは思っただけで、口には出さなかった。

「他の奴らも盾は持ってなさそうだが、大丈夫だろうか」

「必要だと思ったら買いに来るだろうし、とりあえず自分のだけ買えば良いんじゃないか？」

「それもそうだな」

アルレシヤも鉄製の盾を手を取った。

エルダーたちが待ち合わせ場所に着いた時には、他の仲間たちは全員揃っていた。

「皆、何買ったんだ？」

「私たちは新しい武器よ。これで前よりは強い攻撃が出るはずよ」

ユリアンは嬉しそうにレイピアを指した。

「武器を買って喜ぶなんて、何か、ユリアンもすっかり冒険者っぽくなっちゃったな」

ユリアンはバツが悪そうに笑った。

「プロの冒険者と比べたら、とつても弱いけどね」

「私も新しい矢を調達してきたわ」

オーヴアルはトーレンスが手にしている槍を見た。

「トーレンスも新しい槍を買ったんだな」

「はい。鉄製の物ですよ」

「皆買い忘れた物は無いな？」

アルレシヤの問いに、皆頷く。

「よし、それじゃあ海浜公園へ行こう」

「海浜公園ってここから近いのか？」

「歩いていけばすぐ見えてくるはずだ」

市場を出て少し歩くと、ファルネウスが前方を指さした。

「あれよ」

横に大きい門が見える。

「随分と大きな門だな」

公園に入ると、エルダーは目を見張った。

「これが公園？ 広すぎるだろ！」

見渡す限り、芝生が広がっている。果てが見えない。

そこら辺にある公園とは、規模が違いすぎる。

「めっちゃくちゃ広いですけど、芝生以外何があるんですか？」

トーレンスも、ひたち海浜公園を訪れたのは初めてだ。

「今はコキアっていう植物があるはずだよ」

「コキア？」

オーヴアルは首をかしげた。

「ネモフィラなら聞いたことがあるが……コキアも花なのかい？」

「夏から冬にかけて緑色、赤色、黄色と色が変わる植物です。花ではないはずですよ。……ねえ、係長」

「俺も知らん」

アルレシヤは肩をすくめた。

「実際に見てみる方が早い。フィニアの用事が済んだら、見に行こうか」

「教会はこちらです」

フィニアを先頭に、一同は歩き出した。

周囲にも冒険者なのか観光客なのか分からないが、けっこうな数の人がいる。

ファルネウスは意外そうに呟く。

「けっこう人が来てるわね」

「ここにも魔物がいるんでしょうか」

オーヴァルは首をひねった。

「魔物退治に来たようには見えないが」

皆で話しながら歩いてみると、教会らしき建物が見えってきた。

エルダーたちが運び込まれた教会よりも小さい。

フィニアが教会のドアを叩くと、ややあって白地に金色の刺繍が施された服に身を包んだ初老の男が出てきた。

「ニルス司祭様」

司祭はフィニアの姿を認めると、驚きの声をもらした。

「フィニア、よく無事にたどり着いたな」

「はい。この方たちがついてきてくれたおかげです」

司祭の注目を受けたエルダーたちは、会釈をした。

「冒険者の方と……役所の方ですか？ この度は、うちの神官が世話になりました」

「こちらこそ、フィニアの魔法に助けられました」

そう言うアルレシヤは、ひたちなかの役人を示すブローチをつけているとはいえ、司祭に役所の人間だと認識されただろうか。

「こちらは、魔物は現れていないのですか？」

「私はまだ見ていないが……時間の問題でしょうね」

フィニアは鞆から宝石のようなものを取り出した。宝石自体は無色に近いが、見る角度によって赤や橙、水色など様々な光を反射している。

「ありがとうございます」

「何の宝石なんだ？」

フィニアはエルダーの方を向いた。

「これは、輝石といって、ザサ教の大切な聖物なのです」
「普段はここに安置されていたのですが、東石川の教会の方で行事があったて、貸していたのですよ」

フィニアの用事は、司祭に輝石を届けるだけのことだった。

教会を後にすると、エルダーたちは、みはらしの丘を目指して歩いた。周囲の人々も同じ方向に歩いているた

め、公園の一番の見所なのだろう。

しばらく歩くと、丘のようなものと丸くて赤いものが見えてきた。

「あれがコキアだよ」

「へー！ あれが！」

エルダーは駆けだした。

コキアの近くまで来ると、エルダーはしゃがみこんでコキアをまじまじと見つめた。丸く見えるが、よく見てみると、細い茎と小さな葉がたくさん集まっているらしい。

「確かに花ではなさそうだ」

少し遅れて来たトーレンスが、誰に言うでもなく呟いた。

「で、これが季節によって色が変わると」

オーヴァルも興味津々といった様子で、コキアを観察している。

「そうよ、あと数週間もすれば黄色になるんじゃないかしら」

丘に登りきると、辺りの景色を見渡しながらエルダーは歓声を上げた。

海が見える。

「海が見える丘だ」

エルダーの呟きを聞き、ファルネウスが頷いた。

「ここは見はらしの丘よ」

「へえ」

海も、一面に広がる赤いコキアも、見渡せる。

「すごいな……」

トーレンスの口からも感嘆の声がこぼれ出た。

青い空と海。赤いコキア。青と赤の対照的な色が、景色の鮮やかさを際立たせている。

これほど美しい景色が茨城にあるとは思わなかった。

「茨城もいい所でしょう？」

ファルネウスの声には、誇らしげだが傲慢する響きが無かった。ファルネウスは、どの地域が素晴らしい所かは、その人によって違うことを知っている。

「そうですね。俺、なんだかんだ言って茨城より地元が優れていると思っていたんですが……茨城もいい所ですね」

トーレンスは、卒業後は栃木に帰るつもりだ。今のところは。

もしかすると、自分が知らない、茨城の美しい景色は他にもたくさんあるのではないだろうか。本当に四年間だけで茨城を出て良いのだろうか。

エルダーの近くにいたフィニアも目を細めながら、コキアを眺めている。

「この丘には、春には、ネモフィラという青空のような綺麗な色の花が咲き誇るんですよ」

「へえ。青い花か。珍しいな」

エルダーは、春になったら再びひたちなかを訪れてみようと思った。

「そうだ、春になったら一緒にネモフィラ見に来ないか？」

「え」

「せっかく知り合えたんだから、今回の旅が終わったら二度と会わないのも寂しいだろ？俺もネモフィラ見みたいしさ。俺、またひたちなかに来るよ。その時は色々案内してくれよ」

フィニアは笑った。

「ええ、約束ですよ」

ふと、目深にローブを被る男の姿が見えた。顔が見えないほど目深にローブを被っているせいかな、この綺麗な景色には不釣り合いなほど陰気な雰囲気だ。

注意深く男を見ていると、何やらブツブツと呟いているのか、口を動かしている。

その時だった。

「魔物だ！」

周囲から悲鳴と、誰かの叫ぶ声が聞こえてきた。

エルダーたちは一斉に武器を構えた。

コキアン（赤タイプ）、ナットウルフ、ヒラメンなどの魔物が何十体と姿を現した。

ドライポテトを切り裂きながら、エルダーは、ローブ姿の男が慌てる様子もなく丘を降りていくのを見つけた。

魔物を倒さず、ある一点を見つめる仲間の様子に、オーヴァルは怪訝な表情をした。

「エルダー？」

「……アイツ、さっき魔物を召還していたっぽい」

オーヴァルの目に驚きの色が走る。

「何だって？」

「俺、後をつけてみるよ」

幸い、エルダーたち以外にも冒険者がいたらしく、戦力は足りているようだ。

オーヴァルは、走り出そうとしたエルダーの腕を掴んだ。

「一人で行くつもりか？」

「でも、大勢で行ったら気づかれるし……」

「せめて二人で行こう」

オーヴァルは近くにいた、学院の後輩に声をかけた。

「トールレンス、もし、私たちが半刻経っても戻らなかったら、園内を探し回ってくれないか？」

トールレンスが眉を上げた。

「どこに行くんですか？」

「敵を尾行するだけさ。……大人数だと気づかれる」

ひたちなか出身ではない三人は、ひたち海浜公園の広さを把握しきれていなかった。

男は、コキアや魔物には目もくれず丘を降りていく。

丘から降りて少し歩くと、何やら古い民家らしき所にたどり着いた。

男は隠れるように、民家の後ろに姿を隠した。

エルダーはオーヴァルと顔を見合わせると、民家の後ろ手に回った。

「…あれ？」

男の姿が見えない。

「やはり来たか」

突如背後から声をかけられ、エルダーたちは慌てて振り返った。

ローブ姿の男が、エルダーたちを感情のない目で見つめている。

「お前は何者なんだ？」

「先に名乗るのが礼儀ではないかね？」

「…私はオーヴァルⅡクレイグ。こっちはエルダーⅡケルデイルだ」

オーヴァルは警戒しながらも名乗った。

「私はデイルセⅡオールスタイン」

「丘で魔物が現れたが…：…さっきのはお前の仕業か!？」

エルダーの問いに、デイルセはゆっくりと頷いた。

「いかにも」

(続く)